

# 追懐

柳瀬川ひろし

「本日は小雪のちらつく中、父の葬儀にご列席いただきまして、本当にありがとうございます」

おそらく西向きであろうと思われる窓に目をやると、斎場の灯りに照らし出された駐車場に雪が斜めに降り続けているのが見えた。

藤村由美は、初めて見る正道の息子に、その懐かしい面影を探しながら聴くとはなしに耳を傾けていた。

「私は正道の長男で正宗と申します。晩年の父は地域の皆様のために働きたいと、ボランティア活動に精を出す日々を送っておりました。とはいえ、体が動かなくなり耳も遠くなってくると、かえって皆様にご迷惑をおかけすることが多くなってきたように思います。それにもかかわらず、こうして雪の中お集まり下さったことに、心より感謝申し上げます」

由美は思う。「俺の別荘で暮らさないか」と言ったのは、本当にこの遺影の男だったのかしらと。

「別荘と言っても普通の住宅と変わらん。ただ風呂に下山温泉と同じ源泉から水を引いてるのが、ちょっと別荘らしいところかなあ」

正道は公務員だったが、生来の器用さから自分で廃材や中古の建材を集めて家を建ててしまったのだ。けれど一度も連れて行ってくれたことはない。写真すら見せてくれたこともなかった。

「父は山の仕事しかない山奥の貧しい家の6人兄弟の長男として生まれ、若くして亡くなった祖父とともに、日雇い労働者として働いたそうです。幼い兄弟たちを養うため学校に行くこと



も叶わず、どんなに悔しい思いをしたか分からないと祖母に聴かされたことがあります。しかし、父がそのような話を私たちにしたことは一度もありませんでした」

正宗は、ちょっと窓の外の雪を気にしたようだった。

「父は少年時代から祖父とともに肉体労働をしていたので体は頑丈でした。主に道路工事をしていたようで、そんな経験を生かした石積みの作業などは見事というしかありませんでした」

由美は、太くて筋肉の盛り上がった正道の二の腕を思い出していた。

「80になったら別荘で一人暮らしをするつもりやき、そうになったら一緒に暮らそうや」

初めてその話を聴かされたのは、もう20年も前のことになる。由美が離婚した後のことだ。

由美が勤めていた病院に事務局長としてやってきた正道は、当時まだ50手前だった。

JRで片道2時間近くをかけて通勤していた正道は、土地の者以上に熱心に地域医療のことを考えてくれた。

私はその仕事ぶりに参ったのだと由美は思う。

由美は結婚してまだ2年目で、長女が誕生したばかりだった。産休明けの職場復帰と正道の異動とがちょうど重なり、何とはなしに口をきくようになった。

由美は事務仕事を終え一旦うちに帰ってから、長女の真矢を連れて職場にやってきたものだ。正道と何人かの職員はまだ病院に残っていて、仕事なのか雑談なのか分からないが、楽しそうに

語らっているのを傍らで見ているのが好きだった。

しばらくすると、真矢は正道や職場の仲間たちにすっかり懐いていた。

慣れない育児に挫けそうなこともあったが、由美は、長女とともに職場に受け入れられたことが何よりの自信となって仕事に打ち込むことができた。

そんな雰囲気を作り出してくれたのが、正道だったのだと思う。

「私から見た父は、勤勉であり義理人情に厚い人のように思われました。また意外でしたが、ちょっとしたお洒落に気を遣う人でもありました。男ばかり3人の息子に囲まれて、いったいどんな人生だったのか、そのお洒落はいったい誰に対してのものだったのか。私たち家族にはさっぱり分かりませんでした」

「局長もたまにはこういうネクタイをしてみるといいですよ」

由美は、たいそうな贈り物ではなくて、たくさんとれた野菜をお裾分けする感覚でプレゼントしたものだだった。

ときどき若い看護師たちが、「局長さん。ネクタイおしゃれえ」と声を掛けているところに遭遇したことがある。

あれは私が選んでプレゼントしたものよと心の中では言えるのだが、看護師たちに面と向かっては言えなかった。妙な憶測をされ、変な噂でも立とうものならやっかいなことになる。

それでなくても病院は医師と看護師との噂が立ちやすい職場なのだ。それは職場特有の「ここだけの話よ」と前置きされる、当人以外の楽しみの一つなのかもしれない。だから、事実とはかけ離れた憶測や妄想であっても、面白おかしい話のタネとなって、口から口へと伝染してゆくのだ。



そんな噂話が誰かを傷付けるなどと考える者はまずいない。もし仮に噂の当人の耳に入ったとしても、うまく切り抜け場を収める技を持つベテラン看護師がいる。これは職場の和を保つための、きわめて高度なテクニックの一つなのだ。私も結婚する前は、あの若い内科医と噂を立てられたものだ。

ふっとおかしくなり外を眺めると、窓枠に沿ってうっすらと雪化粧が施されたのが分かった。雪はまだ同じ調子で降り続けていた。

「別荘と云っても、掘っ立て小屋だろうと思っていたのです」

別荘という言葉で、由美は我に返った。

「数年前、父があまり熱心に誘うものですから、二人で別荘に行ってみたのです。国道から県道に折れ、また国道に出て、それも、これが国道なのかと驚くほど狭くて曲がりくねった山道を進み、ちょっとした集落に出たのでした。父は小さな橋の傍らで車を停めるように言うと、持ってきた荷物の中から日本酒の瓶を取り出しました。いつの間にそんなものを用意していたのかと吹き出しそうになりましたが、しぶしぶついて来た手前、にこやかにもできず知らん顔をしていました。父は車を降りると橋を渡り、川向こうの高台にある茅葺の日本家屋に入って行きました。父の姿が見えなくなると、私は安心して集落を見渡しました。それは日本昔話に出てきそうな閉ざされた奥ではなく、生活道路沿いに点在する集落の一つのようでした。人や物の行き来のある、まだ代謝作用の働く集落という印象を持ちました。おそらく父はこの近くに別荘を建て、知人に管理し



てもらっているのだろうと想像しました」

由美が正道から聴いた話では、近くにちょっとした温泉場があるとのことだった。温泉場と云っても集落の人々の憩いの場となっているだけで、一年を通してどれほどの運営がなされているかも定かではないと言っていた。その水を引かせてもらい、風呂に蛇口を一つ設けたらしい。

「父が車に戻り、さらに10分ほど先に進むと、対岸の檜の植樹がなされた人工林の入口付近に、トタン屋根の小さな平屋が現れたのです。このときはさすがに私も父の顔を見て笑いました。立派だったのです。トタン屋根ではありましたが、山中にあるにしては堂々としていたのです。玄関らしい扉は西洋式で、真鍮のドアノブが重厚な雰囲気を感じさせました。サッシではなく木枠のガラス窓が昭和ぽくてほのぼのとしていました。右端には煙突が片手を揚げたように突き出ている、シンプルな平屋に人の住む気配を与えていました。どのパーツもなぜか既視感のある懐かしさに包まれていました」

正道は5年で本庁に戻ったが、戻る1年前に突然妻を亡くした。クモ膜下出血だった。見るに堪えないほどの憔悴ぶりで、職場に通ってくるのが精一杯の様子だった。仕事も手に付かず、副局長が支え続けた。それが3ヶ月続いた後、正道は蘇った。由美は男として正道を見たことはなかった。けれど正道との関係は、時間や場所によって、父であったり、叔父、同僚、古くからの友人であったりした。

正道の退職が近付いた頃、久しぶりに会った市内のレストラン

で別荘の話を聴かされた由美は、一人娘の大学進学も決まっ

ていて晴れやかな気分だった。娘は県外の大学を選び私の一人暮らしが始まる。由美は、20年後ではなく、今誘ってほしかったのにと残念に思ったことを覚えている。私は今更何を期待してここに残っているのだろう。

「話が長くなってしまいました。雪も小降りになってきたようです。愚にも付かない父の思い出話にお付き合いいただきましたことを心より感謝いたします。最後になりますが、遺言の中に、ある方を別荘に招待してほしいとありました。お名前は、ゆみ様です。親しくされていた方だと思いますが、年賀状では確認できませんでした。本日ご記帳いただいた中に、お一人ゆみ様がいらっしゃいます。まだお残り下さっているようでしたら、散会后、お声をおかけ下さい」

由美は固まったまま視線だけをずらして周りを観察した。集まった人々は互いに顔を見合わせている。あからさまに視線を泳がし、「ゆみ」らしき人物を探している者もいる。

うかつだった。病院の関係者が他にも参列しているかもしれないと、なぜ最初に考えなかったのだろう。窓の外では雪が完全に止み、駐車場の灯りが闇をより深く演出していた。

その窓際でじっと由美を見ている老女が、あのベテラン看護師であることに、由美はまだ気付いていない。